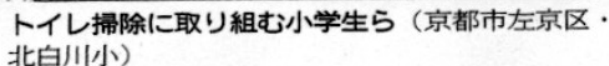


また夜が明けきらない早朝から、北白川小（京都市左京区）に、児童や保護者、地域住民らが集まり始める。午前六時半すぎ、七班に分かれた計百二十人は校内のトイレに散っていった。

便器を磨くことを通じて心を鍛えようと、市民ら有志が「京都掃除に学ぶ会」を結成したのが十年前。さらに、同会の活動に賛同する教育関係者が昨年二月に「便きよう会」を立ち上げた。両会は毎月第三土曜日の早朝、京都市内の小学校のトイレで掃除を続け、地域住民らも参加している。

北白川小三年の大和勝宣君
(九)は校舎一階の男性職員用
トイレを担当した。トイレ掃
除の経験はあるが、素手は初
めて。「ちよっと気持ち悪い」。
右手に持ったサンドメッシュ
でこわこわ便器を磨き始めた
が、左手で直接便器に触るこ
とができないので、力を入れ
づらいうつだ。

後方の個室トイレでは、岩
淵信明校長が便器磨きの仕上
げ段階。スポンジをつかんだ
手をためらいなく便器に突っ
込んでゐる。「二度高いハ―



受け継ぐ
トイレ掃除

ドルを超えると、抵抗感がなくなるので不思議です」。ピカピカ光る便器に水を流すと、「これで手を洗えるくらいですよ」と余裕の表情だ。それを見ていた大和君。「わあ、すごい」と驚きの声を上げ、校長先生の姿をまぶしそうに見つめると、自分の便器に果敢に向かっていた。

スプレー式の強力な洗剤をつけ、少し時間を置いて流すだけでトイレ掃除が終わる時代。ところが、両会の掃除は、こびりついた汚れをていねいにはぎとり、少量の洗剤で磨き、使う水の量が最小限に抑える。「便利さ」とは対極にある。

終了後、小学五年生の女の子は「トイレ掃除は大変。これからはお母さんのお手伝い

をしたい」と話し、ある母親は「環境にも良く、この方法

あえて素手 心も磨く

が一番汚れが落ちると実感した」と、驚いた様子。大和君も「友だちには気持ち悪いと思われるかもしれないけど、ぼくはすこく気持ち良かった」

素手で便器と向かい合った時間の中で、参加者はそれぞれに新たな発見をしたようだった。

次・嵯峨小校長は「子どもたちの心の変化だけでなく、教師側も子どもをじっくり見ようという姿勢につながる。取り組みを受け継いでいければ」と話している。

(社会報道部 有賀美砂)

**くらし
レポート**